出品作家解説

秋山 庄太郎 AKIYAMA Shotaro	1920-2003	東京生まれ。13歳から写真を撮り始める。43年、大学卒業後、作品集を自費出版。戦後、稲村隆正、土方健介らと秋山写真工房を設立。47年、林忠彦らが結成した「銀龍社」に参加。51年からフリーランスとなり、写真雑誌を中心に女優、文士、画家等のポートレイトを発表する。70年代から花の撮影を始める。58年、日本広告写真家協会の創立会員となり、後に名誉会長となるなど、後進の育成や写真の普及に貢献した。
飯田 鉄 IIDA Tetsu	1948-	東京生まれ。高校を卒業後、フリーランスの写真家となる。都市空間で生活する人と、人間性を形成する都市のあり方を表現する作品に取り組む。歴史的建造物の撮影を手がけるとともに、カメラの技術解説に関する文章も多数発表している。87年、日本写真協会新人賞受賞。
石元 泰博 ISHIMOTO Yasuhiro	1921-2012	サンフランシスコ生まれ。生後間もなく両親と帰国するが、高校を卒業した後、単身渡米。第二次世界大戦中は日系人キャンプに収容される。そこで写真に興味を持ち、戦後、シカゴ・インスティテュート・オブ・デザインで学び、ハリー・キャラハンらに師事。53年に帰国し、桂離宮の撮影を開始。翌年に個展を開催し、脚光を浴びる。69年には日本国籍を取得。78年に芸術選奨文部大臣賞、96年に文化功労者受賞など、受賞多数。98年、東京都写真美術館にて「石元泰博展―シカゴ、東京」を開催。
一村 哲也 ICHIMURA Tetsuya	1930-	長崎県生まれ。大学を卒業し、似顔絵描きをしていて偶然秋山庄太郎に出会い、写真を志す。56年、第1回国際主観主義写真展で特賞を受賞。繊細で大胆な女性写真で脚光を浴び、ニューヨーク近代美術館やグラーツの展覧会などに取り上げられる。78年以降は、日本の風景、歴史や伝統をテーマに活動を続けている。
今森 光彦 IMAMORI Mitsuhiko	1954-	滋賀県に生まれる。大学卒業後、昆虫学と写真を独学、80年からフリーランスの写真家として活動を始め、世界各地の昆虫の生態や滋賀の里山の撮影に取り組み、国内外から高い評価を得る。95年には『世界昆虫記』で木村伊兵衛賞を受賞。翌年には滋賀県立琵琶湖博物館開館記念展「里山 生命の小宇宙」を開催、写真作品と併行し、NHKの「映像詩 里山」シリーズの企画に携わる。2008年、東京都写真美術館にて「昆虫 4億年の旅」を開催。
臼井 茂信 USUI Shigenobu	1919-1994	神奈川県生まれ。幼少から鉄道を愛好する。中学卒業後、東京帝国大学（現東京大学）に勤務。在職しながら精密工学校に学び、文部教官専任となる。大学に勤務する傍ら蒸気機関車の調査研究を行い、多くの研究論文を発表するとともに鉄道写真を撮影する。鉄道研究に基づく鋭い視点から優れた作品を残している。
小畑 雄嗣 OBATA Yuji	1962-	神奈川県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。出版社勤務を経て、フリーランスのカメラマンとして独立し、雑誌や広告写真の傍ら創作活動を行う。北海道の冬の幻想的な世界を表した写真集「二月」は高い評価を得る。2008年、東川賞特別賞受賞。
木村 伊兵衛 KIMURA Ihee	1901-1974	東京生まれ。23歳で写真館を開業。その後、アマチュアカメラマンとして活躍するが、30年、花王石鹸の長瀬商店広告部の嘱託となる。32年、野島康三、中山岩太と『光画』を創刊。41年、東方社の写真部責任者となり『FRONT』の撮影にあたる。戦後はリアリズム写真運動を主導し、写真界に大きな影響を与える。50年、日本写真家協会の初代会長に就任。52年、『カメラ』の審査を土門拳と共に担当。55年に菊池寛賞、56年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。
黒川 翠山 KUROKAWA Suizan	1882-1944	京都生まれ。写真を独学し、06年、比叡山を撮影した《雨後》が戦捷記念博覧会で名誉銀牌を受賞。山水画を思わせる風景写真や名所風景の写真を多数発表した。写真愛好家の「翠影会」を主宰するとともに、後進の育成にも尽力した。
児玉 房子 KODAMA Fusako	1945-	和歌山県生まれ。70年に大阪万博会場の解体風景の撮影を機に、都市に目を向けた作品を制作。原子力発電所や最新の研究所、病院など最先端の科学技術の現場を取材した『CRITERIA』は異色のドキュメンタリーとして脚光を浴びる。93年には日本写真協会年度賞を受賞。その後も都市と周縁の街と人を撮り続けている。
佐伯 啓三郎 SAEKI Keizaburou	1918-1991	東京生まれ。戦前からライカを手にして浅草などを撮影する。戦後、報道写真の撮影、映画の制作を行う一方、秋山庄太郎、林忠彦、植田正治らと「銀龍社」の創設に参画する。50年、映画『尾瀬ヶ原』で日本映画技術賞、『図説天文学』の制作で芸術選奨文部大臣賞を受賞。その後も映画の制作に取り組み、約60本の映画を制作する。
佐久間 兵衛 SAKUMA Hyoue	1907-1982	岡山県生まれ。東京写真専門学校（現東京工芸大学）卒業後、野島康三、中山岩太らが発行した『光画』に参加。新興写真の制作と普及に貢献した。
桜井 栄一 SAKURAI Eiichi	1909-1998	群馬県生まれ。大学卒業後、光学関連会社に就職し、その後社長も務める。中嶋謙吉に師事し、いわゆるベス単による自然と人間の融合を感じさせる風景写真を主に撮影した。80年代にはアメリカでも個展を開いたが、生涯を通じてアマチュア写真家としての姿勢を貫いた。叙情性に満ちた独自の作風は、日本のピクトリアリズムにおいて存在感を放つ。
篠山 紀信 SHINOYAMA Kishin	1940-	東京生まれ。日本大学芸術学部写真学科在籍中から広告制作に携わる。大学卒業後、フリーランスの写真家として活躍。66年、日本写真批評家協会新人賞を受賞。70年代には《NUDE》で新たな女性像を提示。以後、女優やアイドルなどのグラビア写真を多く手がけ、「激写」という言葉を流行語にした。一方、日本の伝統的な家屋の記録や飽食の時代に日本食の豊かさをビジュアル化した《食》などの話題作を発表する。また、複数のカメラを組み合わせたり、ハイビジョンを取り入れた表現など斬新な活動を続けている。
柴田 敏雄 SHIBATA Toshio	1949-	東京生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、同大学院修了。その後、ベルギーのゲント市王立アカデミーで写真を学ぶ。日本各地の造成地を大型カメラでとらえた「日本点景 On the spot」と翌年の「日本典型 Quintessence of Japan」展が高い評価を得て、92年に木村伊兵衛賞を受賞。海外でも高い評価を得ている写真家の一人で、世界各地の美術館に作品が収蔵されている。
島田 謹介 SHIMADA Kinsuke	1900-1994	長野県生まれ。幼少の頃から写真に興味を持ち、東京美術学校（現東京藝術大学）写真科の入学を目指すが、入学募集の無い年にあたり断念。20年、東京朝日新聞社会部写真係に入社し、ニュースカメラマンとして活躍する。50年代半ばから日本の風景を自由に撮ることを始め、武蔵野の風景を撮影した写真集『武蔵野』で日本写真協会年度賞を受賞。
清水 武甲 SHIMIZU Bukou	1913-1995	埼玉県生まれ。秩父で実家の「清水写真館」を継ぐ傍ら秩父の記録写真を撮り生涯のテーマとする。また、写真に限らず、秩父における文化活動の中心人物として、多角的な活動を生涯にわたり続けた。『秩父』で日本写真協会年度賞受賞。
鈴木 理策 SUZUKI Risaku	1963-	和歌山県生まれ。東京綜合写真専門学校研究科修了。故郷熊野の作品で、風景写真の新時代を担うアーティストとして国内外から高い評価を得る。東京から青森県恐山や和歌山県熊野へ旅した作品で、2000年に木村伊兵衛賞受賞。2007年、東京都写真美術館にて「鈴木理策: 熊野、雪、桜」展を開催。
薗部 澄 SONOBE Kiyoshi	1921-1996	東京生まれ。43年、東方社に入社し、木村伊兵衛のもとで現像技術などを学ぶ。47年、サンニュースフォト社に入社し、カメラマンとなる。50年、岩波映画社に入社し、岩波写真文庫の撮影を行う。57年独立。生涯を通じて日本の生活、風習などに密着した写真撮影に取り組む。68年と89年に日本写真協会年度賞、94年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。
高梨 豊 TAKANASHI Yutaka	1935-	東京生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、商業写真家の助手となるが、大辻清司に影響を受け、桑沢デザイン研究所に入学。同所卒業後、日本デザインセンターに入社、コマーシャルやファッション写真を手がける。64年から《東京人》シリーズの撮影を始める。68年、多木浩二、中平卓馬らと『プロヴォーク』を創刊。70年以降はフリーランスとなり、都市論としての写真を深化させている。84年と93年に日本写真協会年度賞を受賞。
築地 仁 TSUKIJI Hitoshi	1947-	神奈川県生まれ。67年、東京写真大学（現東京工芸大学）短期大学部写真技術科卒業。70年頃から都市景観をモチーフに撮影を開始、現在に至るまで独自の都市論を展開している。79年、谷口雅、島尾伸三、金子隆一らと「カメラワークス」を結成。85年、日本写真協会新人賞を受賞。
土田 ヒロミ TSUCHIDA Hiromi	1939-	福井県生まれ。福井大学工学部卒業後、会社員をしながら東京綜合写真専門学校に学ぶ。71年ニコンサロンの「自閉空間」展で太陽賞を受賞。それを機に会社を辞し、フリーランスの写真家として本格的に活動を始める。74年、ニューヨーク近代美術館「New Japanese Photograph」展に選出。76年『俗神』を刊行、77年「砂を数える」展を開催。その頃から広島をテーマに撮影を開始する。82年、日本写真協会年度賞受賞。2007-08年、東京都写真美術館にて「土田ヒロミのニッポン」展を開催。
内藤 正敏 NAITO Masatoshi	1938-	東京生まれ。早稲田大学理工学部卒業。大学在学中、写真部に属し、国立近代美術館「現代写真」展に出品。大学卒業後、企業の研究所に入社するが一年で退職。フリーランスの写真家として活動を始める。化学反応を表現した「SF写真展Z・A・Z」展でカメラ芸術新人賞を受賞。この頃より民俗学に関心を持ち、出羽湯殿山の即身仏に衝撃を受け、取材を始める。イタコや霊場など日本の信仰風習、都市の闇を撮影するとともに、民俗学の研究も行い、多くの論考を発表している。86年、『東京―都市の闇を幻視する』で日本写真協会年度賞を受賞。
中村 征夫 NAKAMURA Ikuo	1945-	秋田県生まれ。独学でダイビングと水中写真に取り組む。68年に水中写真のプロダクションに入社し、7年ほど勤務した後にフリーランスの水中写真家として活動を始める。世界各地の海を撮影するとともに、コマーシャル・フィルムや劇映画、ハイビジョン映像の制作に携わる。88年に木村伊兵衛賞、94年に文化庁芸術作品賞をはじめ受賞多数。2006年、東京都写真美術館にて「中村征夫写真展 海中2万7000時間の旅」を開催。
並河 萬里 NAMIKAWA Banri	1931-2006	東京都生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、KRT（現東京放送）報道部に入社するが、約半年で退社。フリーランスの写真家として活動を始める。美術史や考古学など豊富な知識に裏付けされた眼差しで、イスラム世界やシルクロードを中心に、世界各地の遺跡を精力的に撮影する。日本写真協会年度賞や毎日芸術賞をはじめ、イラン王室文化章やトルコ共和国文化功労章など、国際的な受賞も多い。
楢橋 朝子 NARAHASHI Asako	1959-	東京都生まれ。早稲田大学第二文学部卒業。大学在学中から写真活動を始める。96年、石内都とともに『main』を創刊。日常に潜む不穏な空気や異なる次元の存在を喚起させる写真に国内外から高い評価を得ている。98年、日本写真協会新人賞受賞。
奈良原 一高 NARAHARA Ikko	1931-	福岡県生まれ。中央大学卒業後、早稲田大学大学院芸術専攻に進む。56年に桜島の集落と人工の炭鉱軍艦島をテーマとする「人間の土地」を発表し、写真界の注目を集める。59年、第2回ヴェネチア国際写真ビエンナーレで銅賞を受賞し、東松照明らとともに「VIVO」を結成。以降、パリやニューヨークを拠点に活動し、国際的な評価を得る。2004年、東京都写真美術館にて「奈良原一高 時空の鏡：シンクロニシティ」展を開催。

野町 和嘉 NOMACHI Kazuyoshi	1946-	高知県生まれ。高校卒業後、写真家を志して杵島隆に師事する。71年、フリーランスとなり商業写真を手がける傍らサハラ砂漠の取材を開始。その後、撮影範囲はアルジェリアやモロッコ、エチオピアなどに広がる。80年代後半からは中国、チベットの取材を開始。一貫して、自然や歴史・風土と人間を鮮明な色彩で表現している。2004年、東京都写真美術館にて「野町和嘉 祈りの大地」展を開催。
芳賀 日出男 HAGA Hideo	1921-	旅順生まれ。慶応大学在学中から写真に親しむ。戦後、日本通信社入社、53年にフリーランスのカメラマンとなる。日本各地の民俗儀礼や芸能などの撮影に取り組む。都市化の進展とともに失われゆく日本各地の習俗の記録は高い評価を得ている。85年、日本を含む世界各地の民族写真を提供する「芳賀ライブラリー」を設立。81年～88年には自ら創設にも関わった日本写真家協会の副会長を務める。郷土芸能の保存振興活動にも貢献している。
萩原 露愁 HAGIWARA Roshu	1895-1973	埼玉県生まれ。医師として病院を経営する傍ら大正時代から写真を始める。いわゆるベス単を使い、「芸術写真研究」などに作品を発表。武蔵野の風景を撮影した作品群で知られる。
畠山 直哉 HATAKEYAMA Naoya	1958-	岩手県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科修了。同大学の大辻清司の影響で写真を始める。卒業後、石灰石鉱山や石灰工場などを撮影した作品で注目を集める。その後、東京やヨーロッパの自然と都市との関係を独特の写真論として展開する作品を発表し、国際的な評価を得る。97年、木村伊兵衛賞受賞。2011年、東京都写真美術館にて「畠山直哉」展を開催。
濱谷 浩 HAMAYA Hiroshi	1915-1999	東京生まれ。高校卒業後、オリエンタル写真工業に入社。銀座や浅草の風景を撮り始め、37年、フリーランスとなる。39年、新潟県高田の取材を機に、民俗学に傾倒。その後、新潟県高田に居を移して、日本海側の各地を取材。日本や世界各地の風景写真は国際的に高い評価を得る。86年に写真巨匠賞、87年にハッセルブラッド国際写真賞、97年に英国王立協会名誉会員賞など受賞多数。
林 忠彦 HAYASHI Tadahiko	1918-1990	山口県に写真館の長男として生まれる。39年に上京し、オリエンタル写真学校卒業後、東京光芸社に入社。『写真週報』『アサヒグラフ』などに作品を発表。戦後、秋山庄太郎、植田正治らと「銀龍社」を結成。戦後のカストリ雑誌ブームに東京の風俗を撮影。その後、文士シリーズを手がけ、グラフジャーナリズムの寵児となる。「日本写真家協会」「二科展写真部」などの発足に参加、写真の普及と向上に努める。79年日本写真協会年度賞受賞。91年、徳山市及び徳山市文化振興財団は「林忠彦賞」を創設。
福田 勝治 FUKUDA Katsuji	1899-1991	山口県生まれ。20年に上京して高千穂製作所に入社、趣味で写真を始める。関東大震災を機に大阪へ行き、写真を志し淵上白陽が主宰する『白陽』で助手を務める。33年再び上京し、ヨーロッパのモダニズムなどの影響を受け、広告写真を手がける。クローズアップを多用した作風は高く評価されている。55年に日本写真協会賞、86年に日本写真協会功労賞を受賞。
藤本 四八 FUJIMOTO Shihachi	1911-2006	長野県生まれ。高校中退後、家業を手伝いながら画家を志す。上京後、広告写真に携わる。報道写真家として従軍し、帰還後は戦争による文化財の滅失に危機感を抱き、奈良の古寺の撮影に取り組む。調査に基づき、日本の伝統文化を記録する作品は高い評価を得ている。65年に日本写真協会年度賞受賞。97年に長野県飯田市が「藤本四八写真文化賞」を創設。
松江 泰治 MATSUE Taiji	1963-	東京生まれ。東京大学理学部在学中から写真を始める。地理学的視点から世界各地の地表を取材し、フラットで独特の感覚を喚起する風景写真で国内外から高い評価を得ている。96年に東川賞新人作家賞、2002年に木村伊兵衛賞を受賞。海外での評価も高く、現代日本の写真作家を代表する一人。
水越 武 MIZUKOSHI Takeshi	1938-	愛知県生まれ。中学生の頃から登山を愛好する。大学中退後、写真家を志し、田淵行男に師事する。世界各地の高峰から日本の原生林、熱帯雨林まで地球の生態系を取材した写真作品に高い評価を得ている。91年に日本写真協会年度賞、99年に土門拳賞を受賞。2007年、東京都写真美術館にて「大地への想い 水越武写真展」を開催。
緑川 洋一 MIDORIKAWA Yoichi	1915-2001	岡山県生まれ。歯科業の傍ら在学中に覚えた写真に本格的に取り組む。石津良介の勧めで中国写真家集団に参加。戦後、植田正治らとともに「銀龍社」に参加。女性を被写体とした作品で二科賞などを受賞。その一方、故郷瀬戸内の風景をはじめ、世界各地の風景の撮影に取り組み、高い評価を得る。63年に日本写真協会年度賞を受賞。
森永 純 MORINAGA Jun	1937-	長崎県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、岩波映画製作所写真部に入社。62年にはユージンスミスの助手を務める。その後、渡米し、ニューヨークに生きる人間の孤独をとらえた作品が評価を得、日本写真批評家協会新人賞を受賞。都市の川の表面を撮り続けるなど、独特の都市論を展開し、国内外で高い評価を得ている。
師岡 宏次 MOROOKA Koji	1914-1991	東京生まれ。写真家を志して、鈴木八郎研究所の助手となる。その後、雑誌の編集者などを経た後、戦後、東京フォト社を設立し、フリーランスの写真家として活動を始める。戦後の移りゆく都市景観や文化・風俗を写真で記録するとともに、写真関連の執筆活動や8ミリ映画制作なども手がけた。
山城 知佳子 YAMASHIRO Chikako	1976-	沖縄県生まれ。沖縄県立芸術大学大学院修了。米軍基地問題や沖縄戦体験の継承など、沖縄をテーマとする映像や写真作品の制作に取り組む。2010年、「第2回恵比寿映像祭」に参加。
山村 雅昭 YAMAMURA Gasho	1939-1987	大阪府生まれ。少年時代から写真を愛好し、高校在学中にはカメラ雑誌での入賞を重ねる。日本大学芸術学部写真学科卒業後、植物を独特の視点から取り上げた作品制作に取り組み、高い評価を得る。
横須賀 功光 YOKOSUKA Noriaki	1937-2003	神奈川県生まれ。日本大学芸術学部写真学科在籍中から資生堂社内報『ハウスオーガン』の仕事に携わる。大学卒業後、フリーランスの写真家として資生堂宣伝部の一員として活躍。63年、日本写真批評家協会新人賞、日本写真協会新人賞受賞。広告写真の新時代を切り開いた一人で、コマーシャルフィルム、映画、ビデオの分野にも独特の作品を残した。
吉岡　専造 YOSHIOKA Senzo	1916-2005	東京生まれ。東京高等工芸学校（現千葉大学）写真部卒業後、朝日新聞社出版局に勤務。戦後、政治家から大衆文化まで広い視野から撮影した写真で評価を得る。朝日新聞社退社後は、昭和天皇の御影を撮影したことを機に、皇居吹上御所の植物の撮影を行う。
吉崎　一人 YOSHIZAKI Hitori	1912-1984	福岡県生まれ。高校卒業後、福岡のアマチュア写真クラブに入り、精力的に活動を始める。唯我独尊の精神を志し、「一人」と名乗る。ハナヤ勘兵衛から多くの影響を受け、その師弟関係は生涯にわたった。前衛芸術運動の一翼を担ったが、晩年は郷土色の濃い記録的な写真を撮影し、地元の美術運動に関わった。

榮榮&映里 RongRong&Inri		北京を拠点に活動するユニット。自身の身体を媒介とした表現作品で評価を得ている。2007年に中国初の民間による写真専門施設、三影堂撮影芸術中心を創設。2010年にはアルル国際写真祭と連携した北京初の国際写真展「草場地春の写真祭」を開催。多くのアーティストの育成、紹介にも務めている。

アルベルト・レンガー＝パッチュ Albert Renger-Patzsch	1897-1966	ヴィルツブルク（ドイツ）生まれ。工場や機械を中心に、外見上の美しさを追求する新即物主義の代表的な写真家。ドイツで活躍した。
アンセル・アダムス Ansel Adams	1902-1984	サンフランシスコ生まれ。幼少より写真や登山に興味を持ち、20代前半からアメリカ西部の自然風景をモノクロ写真に収めることに取り組み、生涯のテーマとする。環境保護にも取り組むとともに、高い再現性を生み出す写真技法を生み出し、写真教育にも力を注ぎ、写真の技術書を執筆した。
ウィン・バロック Wynn Bullock	1902-1975	シカゴ生まれ。大学では音楽を学び、ブロードウェイで4年間歌手として活躍するが、38年、写真家になるべくロサンゼルスのアート・センター・スクールに入学。卒業後、商業写真に取り組む。エドワード・ウェストンと親交が深く、影響を受けた。
エリオット・ポーター Eliot Porter	1901-1990	イリノイ州（アメリカ）生まれ。ハーバード大学医学部卒業後、母校で生化学の教鞭をとる傍ら野鳥や自然風景の写真撮影に取り組む。スティーグリッツやアンセル・アダムスに評価されたことを機に写真家を志し、生涯にわたり自然をテーマとする写真制作に携わる。
ジャンルー・シーフ Jeanloup Sieff	1933-2000	ポーランド人の両親のもとパリに生まれる。幼少の頃から写真を学び、20代前半で写真家として独立、活動を始め、モード誌『エル』の写真家となる。間もなく『エル』を辞職し、一時マグナムに参加するが、それも一年ほどで辞め、フリーランスとして活動を始める。パリやニューヨークを活動の拠点としてファッション写真を手がけ、世界的に高い評価を得る。2010年、東京都写真美術館にて「ジャンル-・シーフ写真展」を開催。
ジェリー・N・ユルズマン Jerry N. Uelsmann	1934-	デトロイト生まれ。高校の時に写真に興味を覚え、大学卒業後、フロリダ大学で教鞭をとる傍ら作品制作に取り組む。複数のネガを元にした精緻な合成による超現実的な作品で、世界的に高い評価を得ている。
W. ユージン・スミス W. Eugene Smith	1918-1978	カンザス州（アメリカ）生まれ。第二次世界大戦中はサイパンや沖縄などに写真家として派遣される。戦後は『ライフ』に写真の掲載を続ける。61年、日立のPR写真撮影のために来日。70年代には熊本県水俣や千葉県五井の公害汚染の実態を取材。自ら負傷しながらも、公害汚染を訴える作品は世界的な反響を巻き起こした。徹底した暗室作業による黒と白のメリハリ、トリミングを駆使した被写体の強調に作品の特徴がある。

出品リスト正誤表

No.24　（誤）Ceders　→　（正）Cedars
No.29　（誤）ジュリー　→　（正）ジェリー
No.44・45　（誤）Impressinons　→　（正）Impressions
No.62　（誤）Early Autumn　→　（正）Wheat Harvest
No.110　（誤）HAKATEYAMA　→　（正）HATAKEYAMA
No.114　（誤）Fukuda　→　（正）FUKUDA
No.119　（誤）Obata　→　（正）OBATA
技法の英語表記　（誤）Silver dye breach print　→　（正）Silver dye bleach print